



一貫コース通信

○○First と言う事…考

師走を迎え一段と冬へと向かう時期ではある。しかし、悪戯に、寒さ≠厳しさでもなからう。そもそも人類の出現は、地球史(地質学)的には洪積世第四期の氷河期に遡る。4度(ギョントツ・ミンデル・リス・ウルム)の氷河期に挟まる、3つの間氷期に猿人・旧人・新人(クロマニヨン)の順で現れた。今も尚、間氷期の最中に在るが、更にミッシング・リンク(missing link)の追求は進むであろう。私は、こう言った背景から基本的にヒトは寒さには強いと考える。ちなみに、寒さに耐えられない種は淘汰された。その中には天敵だった生物や病原菌等も含まれるので、結果的に人類が繁栄し易い環境が整ったとも考えられる。

その事はさて置き、ここ4年間は何かにつけ“○○First”の言葉が世界を席卷した。発端は米国の指導者に行き着くが、それを機に周縁的な人々が引用し、流行とも言えなくない状況が作られた。それが許されるのなら…使わない手は無い…と言う思惑なのだろうか。同時に、その先に伺えるポピュリズムへの飛躍が懸念された。今も冷めやらぬ流れの中、○○First 側は良いが、反対側(仮に▽▲とする)に置かれたら、たまったものではない。何故なら、First は強調なので、逆の立場の否定に繋がり兼ねないからだ。

ところで、私が大学の頃、現代よりもジャーナリズムが機能していた様に思う。若しくは世論の緊張度をもっと敏感だった時代かも知れないが、一つの論が出ると、均衡を保つかの様に反論が交わされた。例えば、ベトナム戦争の背景も在るが、本多勝一著『殺される側の論理』が書店に並んだりもした。従って、物事の表と裏や、論の反対に立たされる側に身を置き、思考する事が(特に若者には)求められた。言わば、批判的な思考や態度の重要性を知らされたのである。私も、当然この時代の影響を受けたし、今もこの気質が抜けきれない。それでも随分と温くなったとは思ふ。しかし、昨今、大人を含め、特に若年層には熱いモノを感じたいのだが、時事に対し(国際情勢や、今般のコロナの問題にしても、自然破壊とも言える温暖化問題…等)自分の意見を口にする人とあまり巡り合わなくなった。もしかしたら、自分(日本)に直接関係しない事は蚊帳の外と諦めてしまって居るのかも知れないが、事態はそんなに単純ではないと思うのだ。なぜなら、ヒトは誰でも反対側に置かれる事も在るし、そもそも社会の事象に対して、今を生きる自分に全く責任がないとは考えられないからだ。

私の大学の恩師は、若い時分ジョンズ・ホップキンス大学に留学していた。昨今、コロナ禍の罹患者数集計で名が知られるが、OBには故レーガン元大統領も名を連ねるし、人の犯した罪の一つ、殺虫剤の薬害を訴えた『沈黙の春』の著者、レイチェル・カーソンも卒業生だ。我が国の新渡戸稲造博士もここで学んだ、各界に多くの人材を輩出している名門である。政界は、ともすれば○○First を強調するが、科学は自然の一員としてヒトの立ち位置を示し、そこに帰る事を促す。混沌たる現在の最中、私達はどの言葉に傾聴する時なのか。

